

クレアの Lament Poems における語り手としての土地

鈴木 蓮 一

The Earth as Narrator in Clare's Lament Poems

Renichi SUZUKI

(Received September 1, 2000)

(1)

Seamus Heaney はクレア論の中で ‘The Lamentations of Round-Oak Waters’ (以下 LROW と略す) と ‘The Lament of Swordy Well’ (以下 LSW と略す) について ‘Their social protest and their artistic effort are in perfect step’ と賞賛している。¹⁾ これらの二詩には, 話の語り手が詩人ではなく土地であるという共通点がある。前者は土地の守護神 (genius loci) が, 後者は土地それ自体が擬人化され, 語っている。この擬人法という詩的策術によってこれらの詩は, 1811 年から 1816 年にかけて詩人の住む地域で起こった「囲い込み」という農業改革がもたらした損失を表現している。またこの策術は「彼 (クレア) の詩に現れるであろうすべての政治的含蓄についての責任」 (responsibility for any political overtones that might emerge in his poems) を詩人から解除しているようだ。²⁾ これら二詩は, 語られている内容が当時としてはラディカルであり過ぎたため,³⁾ クレアの生存中に出版されたどの詩集にも収められることはなかった。また用語や思想が部分的には「田舎のプロテスト」の伝統に負っていることは確かではあるが, これらの詩はその伝統をはるかに超えたものであることを John Lucas は指摘している。⁴⁾ LSW には, LROW にみられなかった作品としての成熟がある。その成熟は, クレアの人間の成長とともに発達した社会観と自然観に裏打ちされた詩作の自信が生み出したものである。本稿では, 先ず LROW において「私」として登場するペルソナが語る事柄とペルソナについて語られる事柄に留意して, 土地の守護神の語りにも耳を傾け, 次に LSW においては, 土地それ自体の語りに耳を傾けながら, それらの語りの内容がもつ意味を探っていききたい。

(2)

LROW が書かれたのは 1818 年である。LSW は制作の日付けがないけれど, その数年後に書かれたといわれている。これらの二詩における「嘆き」のテーマと内容が何であるのか, まず LROW から読んでいくことにする。この詩の 1 連はこう始まる。

Oppress'd wi' grief a double share
Where Round oak waters flow
I one day took a sitting there
Recounting many a woe

My naked seat without a shade
 Did cold and blealy shine
 Which fate was more agreable made
 As sympathising mine⁵⁾

Round Oak Waters というのは Round Oak Spring に源を発する小川である。⁶⁾ この川辺に腰を下ろした「私」は、自分と川との境遇を省みて、自分と川との「二人分」の悲しみに沈んでいる。「私」の「多くの悲哀」とは、3連に見られるように、富裕階級の人間が「私」を蛆虫のような取るに足らない人間であるかのごとくに嘲弄し、「私」を虐待することによって自らの権力を確かめている状況を指している。そういう「私」の運命にこの川が共感するとき、その小川の運命は「私」の運命とより一層共通なものとなる。最後の二行 ‘Which (Round oak waters’) fate was more agreable made / As sympathising mine’ という表現は、富める者によって虐待され、「私の衣服は薄く、古かった」(my cloa’hs were thin and old 12) で示されるように経済的困窮に陥っていた「私」と、‘My naked seat without a shade / Did cold and blealy shine’ (5-6) で示されるように樹木は伐採され、茂みも取り払われて「丸裸」同然になった小川のほつりを詩人がヴィジョンの中で同一視することにおける動機付け、あるいは心理的根拠となっている。またこの最後の二行には、共通の悲しみによって自然と人間の親密な関係が予示されている。

川辺に座り、わが身の不幸に思いをめぐらせてはメランコリーに沈む「私」は、自分の悲しみが川の水が流れるように、誰にも知られることなく消え去るのだと思っていた。ところがまもなく「私」の悲しみの言葉を聞いた小川が立ち上がって、自らの悲しみの言葉をつぶやく。小川は自分の悲しみの大きさは「私」の悲しみと同じだという。ここで初めて小川は、自分がこの川の守護神であると告げる。

‘I am the genius of the brook
 ‘And like to thee I moan
 ‘By Naiads and by all forsook
 ‘Unheeded and alone (45-48)

「傷つけられ、友もなく、貧しく飢えに苦しんでいる」(Hurt friendless poor and starv’d 18) 「私」の状態は、「水の精」や森の精などから見捨てられ、孤独な小川の状態と類似している。さらに、川の守護神は、その状況を表す ‘unheeded and alone’ (48) の形容詞に照応する ‘friendless’ (18) や ‘unnotic’d’ (32) で形容される「私」と親密な関係をもっていることがここでも示される。またここには、詩人としての「私」と「自然環境との共感的同一視」⁷⁾ が見られるが、この同一視は「詩人と彼の自然環境との同一化と同盟」(identifications and alliances between the poet and his environment)⁸⁾ を確立することに発展する。

さて次に、守護神は最近起こった出来事によって小川の実情がすっかり変化したことを嘆き始める。守護神の嘆きは、この出来事が自分にどのような影響を与えたかを、この出来事以前の小川の実態を語ることから始める。これは、この出来事を検証することにおいて、出来事以前の状況を抽象的に説明するのではなく、それを具体的に描出し、提示することによって失われた物事が何であったのかを強調するためである。守護神がいうには、最近まで「風にそよぐ柳の木々」が川辺に立ち、「私」のメランコリーを慰めたという。そしてここでの状況をこう語る。

'And here the shepherd with his sheep
 'And with his lovely maid
 'Together where these waters creep
 'In loitering dalliance play'd
 'And here the Cowboy lov'd to sit
 'And plate his rushy thongs
 'And dabble in the fancied pit
 'And chase the Minnow throngs' (61-68)

羊飼いはすてきな恋人と戯れ、のんびり楽しい時を過ごす。牛飼いは草を編んで紐を作り、お気に入りの窪みで水遊びをし、小魚の群れを追う。こうした楽園的イメージは今では消滅したものを読者に強く意識させる。消滅したものがもつ特徴は人間の生の喜びであり、幸福感である。描写された幸福の場面においては、人間の営為が「自然」と調和して展開されている。「自然」の中での恋人たちの戯れは、人間と人間の関係におけるひとつの大きな喜びである。羊の世話も人間と生き物との交流から生じる喜びと同時に仕事の喜びを意味する。この出来事はこうした喜びの喪失をもたらした。幸福の場面の描写は詩人クレアのプロテストの中心部を表現しており、喜びの喪失感が強調されている。羊飼いの恋人との戯れや牛飼いの遊びなどの描写は、すべての現世の品物を市場の商品に変えてしまい、すべての人間の経験を功利主義の価値観によって判断する人々への強烈な批判になるとクレアは考えた。⁹⁾ クレアは田舎の庶民の幸福感について、

'there is happiness in examining minutely into wild flowers as we wander amongst them to distinguish their characters & natural systems of botany . . . — this is happiness — to lean on the rail of wooden brigs* and mark the crinkles of the stream below & the little dancing beetles twharling & glancing their glossy coats to the summer sun — to bend over the old woods mossy rails & list the call of the hairey bumble bee playing with the ivy flowers till he has lost his way . . . — this is real happiness — to stand & muse upon the bank of a meadow pool fringed with reed & bulrushes & silver clear in the middle on which the sun is reflected in spangles & there to listen the soulsoothing music of distant bells this is a luxury of happiness & felt even by the poor shepherd boy' (*bridges)¹⁰⁾

と述べている。つまり、貧しい田舎の庶民でさえ、自然の風景とその中の生き物を綿密に観察することに無上の幸福を感じるという。Jonathan Bate は、このような幸福感は 'anti-Benthamite political economy' に基づくものであると指摘している。¹¹⁾

守護神は次に「私」というペルソナについて語る。「おまえは馬の世話をしたり、馬を駆って畑を耕した」(thou didst thy horses tend / Or drive the ploughmans team 69-70) と描写し、川辺で野遊びを喜ぶ子供達とは違って、彼らから離れ、人気のない場所にこっそり入っていくことが「私」の喜びであるという。「私」は茂みの中の 'solitude' で「野バラやそだの茂み」に取り囲まれて座り、「物語あるいは歌」(tale or song 98) を初心者ながらも創作する。ここでわれわれは、「私」が創作するものは「詩」即ち poetry ではなく、「物語あるいは歌」であることに注目すべきである。口承文化である物語や歌は個人のものではなく、民衆のものである。しかし18世紀後半から19世紀初頭にかけて発展した産業主義社会において、これらの民衆文化は大きく衰退し、

消滅の一途をたどった。「私」が口承文化を志向することは、「私」が民衆、とくに労働者階級の立場から物事を観察し、彼らのために語っていることを暗示している。E. K. Helsinger は LROW と LSW が「集団の声」(collective voice) を反映していて、それらの詩の ‘accents’ と ‘tones’ は労働者のものであると分析し、¹²⁾ John Goodridge は、‘ballad metre’ を用いているこれら二詩が、クレアの最高の詩に見られる特質である「文学的題材と民間伝承の題材の結合」(the combination of literary and popular materials)¹³⁾ をもっていると指摘している。

‘solitude’ はまた別の重要な喜びを「私」に与えている。それは人間以外の生き物に対する興味・関心から生じる喜びである。「私」にとって自然のもつ最大の魅力は生き物の生態である。

‘And there (in solitude) the insect & the flower
 ‘Would court thy curious eye
 ‘To muse in wonder on that power
 ‘Which dwells above the sky’ (89-92)

自然の中の人気のない場所で、昆虫や花は詩人の「好奇心の強い眼」を引きつけ、詩人に驚異の念をもって造化の神を想うようにと誘う。‘curious eye’ という表現は非常に意義深い。なぜならば、ロマン派の詩人達の中でクレアほど生き物の生態に興味・関心を抱いた者が他にいたであろうか。彼らの多くは自己の精神世界を主要な関心事としていたのではなかったか。人間の精神や人為、いわば「人工」(art) というものが「自然」(nature) を支配し、「自然を人間の要求物に適合させること」(the assimilation of nature to human needs)こそクレアが最も激しく攻撃した目標であった。¹⁴⁾ 彼が自然への人間精神の干渉を避けたのは「人為による自然の支配にたいする意図的抵抗」(a deliberate resistance to art’s dominance over nature)¹⁵⁾ であると考えられる。

13 連に至って初めてこの出来事の具体的な状況が語られる。

‘But now alas my charms are done
 ‘For shepherds & for thee
 ‘The Cow boy with his Green is gone
 ‘And every Bush & tree
 ‘Dire nakedness oer all prevails
 ‘Yon fallows bare and brown
 ‘Is all beset wi’ post & rails
 ‘And turned upside down’ (93-100)

「杭と柵」でもって我々はこの出来事が「囲い込み」であるとわかる。共有地が囲い込まれ、すべての茂みや木が根こそぎにされた。消滅したのは自然の事物ばかりではなく、それらとともに牛飼いや羊飼いはなくなった。「囲い込み」は自然風景のみならず、田舎の人間社会にも多大の影響を及ぼした。「しかし今では、ああ、私の魅力は羊飼いや牛飼いや、またおまえにとっても終わったのだ」における ‘For shepherds & for thee’ に注目したい。というのは、この出来事がひどい打撃を与えたのは「私」と守護神にたいしてのみならず、羊飼いや牛飼いに代表される民衆にたいしてもそうであったからである。「囲い込み」が農業労働者の仕事をする場所である土地に地形の変化をもたらしたことは、土地の過去と現在を対比することによって語られる。

'The gently curving darksome bawks
 'That stript the Cornfields o'er
 'And prov'd the Shepherds daily walks
 'Now prove his walks no more
 'The plough has had them under hand
 'And over turnd 'em all
 'And now along the elting Land
 'Poor swains are forc'd to maul' (101-108)

'bawk' とはグロッサリーによれば, 'n., narrow strip of grass dividing two ploughed fields' である。これら草地が開放耕地であった麦畑に縞模様となっていた。開放耕地が囲い込まれる以前は, その草地は羊飼いや道が日々歩いていく道であった。この耕地の囲い込み以後は, 草地も鋤で耕され消滅した。そのため, 今では労働者たちはその新たに耕された湿潤な土の中を, 疲れて重い足を引きずるようにして歩かなくてはならない。

'And where yon furlong meets the lawn
 'To Ploughmen Oh! How sweet
 'When they had their long furrow drawn
 'Its Eddings to their feet
 'To rest 'em while they clan'd their plough
 'And light the Loaded Shoe
 'But ah — there's ne'er an Edding now
 'For neither them nor you' (109-116)

むこうの鋤道が草地と面するところでは, 畝の端にある草は, 鋤で耕して畝と畝の間に長いすじを作り終えた時, 労働者の足には何と心地よかったことか。彼は泥を落として鋤をきれいにし, 靴を軽くするためにくっついた泥をとりながら足を休めていた。'edding' はグロッサリーには 'n., var. of heading; grass at the end of a ploughed field where the plough turns' とある。'bawks' と 'eddings' についての叙述の意図はこうであろう。即ち自然の事物は, それが人為的要素を含んでいたとしても, 労働者たちの仕事の場所と内容に密接な関係をもっていて, 彼らの労働の楽しみや喜びの要因であったことを強調することである。地形の変化によるこれらの自然の事物の消滅は, 彼らの肉体と同様精神にも大きな影響を与えたというのである。「私」の「生まれ育った平原」(native plains) は, 今は囲い込まれてまったくの「丸裸」になっている。それにもかかわらず, その平原は「私」にとって大切なものである。「囲い込み」によって共有地・牧草地・荒地・開放耕地が小さな区画に分割され, 破壊されたことについて Edward Storey は「鋤で耕されて消滅したのは村だけでなく, 彼(クレア)の故郷の風景全体であった」¹⁶⁾ という。

守護神と「私」にとって, 土地は人間とそれ以外の生き物たちの生息地として存在するがゆえに, 破壊されてはならない共通の遺産である。したがって, 守護神と「私」は嘆きを分かち合う。守護神はいう。

'And hap'ly fate thy wanderings bent

‘To sorrow here wi’ me
 ‘For to none else could I lament
 ‘And mourn to none but thee’ (129-132)

「私」というペルソナは個人的な立場に立って語っていないことは既に述べたが、守護神が「私」に向かって「おまえは今ここに住んでいる物思う農夫たちのすべてである」(Thou art the whole of musing swains / That’s now resideing here 133-134) というように、「私」は貧しい農業労働者を代表する。守護神はさらに次のように語る。

‘So while the thoughtless passes by
 ‘Of sence & feelings void
 ‘Thine be the Fancy painting Eye
 ‘On by’ gone scenes employ’d

 ‘Look backward on the days of yore
 ‘Upon my injur’d brook
 ‘In fancy con its Beauties o’er
 ‘How it had us’d to look
 ‘O then what trees my banks did crown
 ‘What Willows flourishd here
 ‘Hard as the ax that Cut them down
 ‘The senceless wretches were’ (153-164)

物事の本質的価値を正しく理解する能力のない不注意な人間とは異なり、想像力の働く「私」の眼は痛めつけられる以前の小川の過去の情景を回想する。その眼は回想された小川のイメージの中の美を熟視し、吟味していく。そして小川とその周辺其自然風景がいかにか美しかったかを想い、川土手を美しく飾る、青々と生い茂った柳を切り倒した無分別な者たちの無情さ、過酷さを非難する。守護神は続けてその非難の対象が誰なのかを明らかにする。

‘But sweating slaves I do not blame
 ‘Those slaves by wealth decreed
 ‘No I should hurt their harmless name
 ‘To brand ’em wi’ the deed
 ‘Altho their aching hands did wield
 ‘The axe that gave the blow
 ‘Yet ’t’was not them that own’d the field
 ‘Nor plan’d its overthrow’ (165-172)

守護神の非難の対象は「囲い込み」の事業を施行する貴族階級と紳士階級である。「富者」の命令に従い、「汗を流して働く奴隷」とは農業労働者階級のことである。彼らに樹木伐採の直接の行為者という汚名を着せるならば、罪のない労働者の名誉を傷つけることになろうという。樹木

に斧を振り下ろすのは確かに彼らではあるが、川辺の野原を所有するのは彼らではない。また囲い込むために野原の破壊を計画したのも彼らではない。こういって守護神は労働者たちを弁護する。‘overthrow’の意味は‘to throw over upon its side or upper surface; to upset, overturn’ (OED)であるから、この語は鋤で掘り返される土のイメージを喚起する。

‘No no the foes that hurt my field
 ‘Hurts these poor moilers too
 ‘And thy own bosom knows & feels
 ‘Enough to prove it true
 ‘And o poor souls they may complain
 ‘But their complainings all
 ‘The injur’d worms that turn again
 ‘But turn again to fall’ (173-180)

野原を虐待する「敵」は貧しい農業労働者をも虐待する。これが真実であることを彼らのひとりである「私」は身にしみて感じている。貧しい労働者の不満のつぶやきは、踏まれたとき抵抗するかのごとくに体を反り返らせるが結局死んでいく、傷ついた虫の姿のようだという。このメタファーは、彼らの不満の声は彼らを圧迫する富裕階級には聞き入れられることはなく、彼らは終に政府の権力に屈服し、敗北していったことを暗示していて、極めて印象的である。‘turn again’の‘again’はグロッサリーによれば、‘against’のことである。‘turn against’は‘to turn in opposition or defiance’ (OED)の意である。そこには1811-1817年のラダイトによる機械の打ちこわし¹⁷⁾を含めた田舎の労働者の抵抗が暗示されている。

農業労働者と守護神の共通の敵は無法者たちである。無法者たちは「正義」をも買収し、「正義」の自由な働きを阻止する。それは、「翼を短く切られた正義」(clipt-wing’d Justice 183)、即ち金銭の魅力に屈服する「正義」が本来あるべきその力を発揮することによって、無法者たちの都合の良いように作った法律に反対することができないようにするためである。

‘These all our Ru-n* plan’d
 ‘Altho they never felld a tree
 ‘Or took a tool in hand’ (186-188) *Ruin

これらの「無法な敵」は自ら伐採に携わり、直接手に斧を持つことはないが、まさしく彼らがRound Oak Watersという場所の破壊を計画したのだとSWは明言する。「場所」が所有している価値のあるものを「場所」から収奪し、「私」を卑しい虫けら同然に虐待した者は、金権によって「正義」を無力にした「富者」であり、「持てる者」(money’d men 21)であると断言する。

最終連では、守護神は続けて、富者が利潤追求における飽くことを知らぬ貪欲さに捕らわれていると非難し、富者が「農業改革」であると唱える「囲い込み」に抗議する。

‘Ah cruel foes with plenty blest
 ‘So ankering after more
 ‘To lay the greens & pastures waste

'Which proffited before
 'Poor greedy souls — what would they have
 'Beyond their plenty given?
 'Will riches keep 'em from the grave?
 'Or buy them rest in heaven?

この連で最も我々の注意を引く語句は 'To lay the greens and pastures waste / Which proffited before' であろう。これは「囲い込み」が行われる以前、貧しい村人達に「利益をもたらしていた」共有地や牧草地を荒廃した状態にするという意味である。'waste' という語は穀物が育たない不毛の、荒れた自然状態、言い換えれば土地が未開墾である状態を意味する。現実には共有地や牧草地は、穀物を増産するために「囲い込み」によって麦畑に変えられた。守護神はこのことを「囲い込み」がそれらの土地を荒廃させたという。共有地や牧草地の方が麦畑よりも有益であったとされている。'proffited' という語は利己心に捕われた「敵」が何にもまして追求した利益を暗示する。こうしてみると、これらの二語は「敵」の価値観とは対立的な価値観を語るために逆用されている。守護神のいう「利益」は功利主義が求める「利益」とは正反対のものである。功利主義に基づく資本主義農業の「改革」は、羊飼いや牛飼いやなどの貧しい農業労働者で象徴される人間と、「昆虫や花」で象徴される人間以外の生き物との好ましい相互依存の関係、また生き物と生き物との調和した関係、いわゆるバランスのとれた生態系の破壊を招いたのではなかったのか。「私利」の飽くなき追求は「自然」の収奪にほかならない。あらゆる生き物から土地や水を収奪することはその生息地の破壊を意味する。上記の引用語句はこうした意味をもっているので極めて重要である。

LROW を以上のように解釈してきた。「私」が語っている部分は初めから4連までである。その部分は、小川の守護神が自分と同じ悲しみをもつ「私」という語りの聞き手を導入するためのものである。「私」は農業労働者のひとりであると同時にこの出来事の意味の重大さをよく理解し、憂える詩人として紹介されている。だが守護神の語りにおけるプロテストの部分がこの詩の主要を成す。Bateはこの詩について 'the point is that the sorrow is felt above all by the land itself, not by the other villagers'¹⁸⁾ と述べている。Round Oak Waters の声は土地の守護神のメタファーではなく、詩の伝統的な比喩的表現でも、またく感傷的虚偽の極端な使用でもない。守護神の嘆きの中で最も重要な主張は次のようになる。「囲い込み」は①自然環境破壊によって生き物の生息地を消滅させた②「人間」と「自然」との調和した関係から生じる田舎の庶民の喜びや幸福感を喪失させた③農業労働者から労働の「喜び」を失わせ、さらに彼らから土地に関する権利を奪い、彼らをより貧困化させた④自然科学的な眼をもった詩人としての「私」から、観察の対象である生き物を奪った⑤ 'greedy souls' と呼びかけられる有閑階級によって計画され、遂行された、ということである。

(3)

次に「19世紀に書かれた最良の詩のひとつである」¹⁹⁾ と S. Heaney が評価した他の嘆きの詩 'The Lament of Swordy Well' を読んでいく。LROW では小川の守護神が語っていたが、この詩の語り手である「私」は Swordy Well という場所もしくは土地そのものである。²⁰⁾ Swordy Well (以

下 SW と略す) は場所もしくは土地であるが、それには貧しい農業労働者のイメージが付随している。SW は自己紹介する次の一節で、自分が教区の救貧院の世話になっている境遇を嘆く。

Im swordy well a piece of land
Thats fell upon the town
Who worked me till I couldnt stand
And crush me now Im down (21-24)²¹⁾

‘town’ はクレアが *village* の意でよく用いる方言である。土地である「私」は教区の責務の対象になったという。「私」は困窮し、破産して救貧院に収容される。ところが、救貧院は「私」を「立っていることができなくなるまで働かせ」、重労働のため「私が倒れてしまった今では、私を押し潰そうとする」という。この一節は、詩人の父親が「立っていることができなくなるまで」道路の補修工事の作業をし、リューマチと貧困のため破産し、余儀なく救貧法により教区の保護を受けていたことを反映していると考えられている。²²⁾ 当時の破産した農業労働者たちは救貧法によって教区からの援助を受けていたとはいえ、彼らの生活が乞食同然であったことはこの詩の冒頭に語られる。

Pe[ti]tioners are full of prayers
To fall in pitys way
But if her hand the gift forbears
Theyll sooner swear then pray
They're not the worst to want who lurch
On plenty with complaints
No more then those who go to church
Are eer the better saints

物乞いをする人々は心に多くの願い事を抱いていて、憐れみの心をもった人にその願い事を聞き入れてもらいたいと努力する。だが憐れみの心をもった人が乞われた贈り物を恵んでくれないことがわかると、彼らは嘆願するよりむしろ悪態をつく。押し付けがましい態度で富者に願い事を言うような彼らが極貧の状態にあるとはいえない。それはちょうど人が教会に通っているというだけで、その人が他の人より信仰深いとはいえないのと同じ事である。「貪欲な一群」(a hungry pack 46) によって虐待されている SW の境遇は、教区の「富者」の世話になっている貧しい農業労働者と同様である。しかし SW は冒頭で描写されたような物乞いにはなりたくないという。

I hold no hat to beg a mite
Nor pick it up when thrown
Nor limping leg I hold in sight
But pray to keep my own (9-12)

またさらに、

For passers bye I never pin
 No troubles to my breast
 Nor carry round some names to win
 More money from the rest (17-20)

SWは小銭を恵んでもらうために帽子を差し出すことはしないし、小銭が投げ与えられても拾わない。憐れみの情をかけてもらうために負傷した脚を見せつけたりもせず、ただ自分自身の両脚を持ち続けることを願望するのみである。‘But pray to keep my own’における my own は my own legs のことであるが、「私自身の両脚」とは、SWが虐待される以前の所有物、即ちこの場所に棲む生き物にとっての「棲家」(abode 86)を、また人間にとっての「住処」(dwelling 182)を可能にする樹木、雑草、茂み、沼、川などをもつ〈土地〉のことである。SWは自分の病名を書いたものを胸元に貼り付けることもしない。別の人からより多くのお金を施してもらうために、既に施しをしてくれた人たちの名前のリストを持ち歩いたりもしない。こう語るSWは、経済的に独立した状態が如何に〈自由〉と結びついているか、また経済的依存状態が如何に人間精神の活動を衰退させるものであるかをよく認識している。

自分が教区の救貧院の世話になっている状態をSWは経済的独立を失った状態、即ち「教区の束縛を受けた」(in parish bonds 25)状態であると判断し、次のように嘆く。

Alas dependance thou'rt a brute
 Want only understands
 His feelings wither branch and root
 That falls in parish hands (33-36)

教区からの手当てに依存した生活は最も嫌悪すべきものであり、その状態は貧窮する者にしか理解できない。貧窮者が生活の支えを教区に頼らざるを得なくなると、その者がかつてもっていた鋭敏な感覚や豊かな感情はまったく萎縮するとSWはいう。SWはさらに救貧院での悲惨な状況を嘆く。

The muck that clouts the ploughmans shoe
 The moss that hides the stone
 Now Im become the parish due
 Is more then I can own (37-40)

今では教区の世話になっているから、農業労働者の靴にくっつく泥や、石に生える苔をSWは所有することができなくなった。貧しい農業労働者のイメージとしてのSWの描写の中に、ここで土地のイメージが混入している。農業労働者と土地の二つのイメージの混在はSWの描写における著しい特徴である。この詩の終わり近くになって初めて‘enclosure’という語が現れるが、それは「ついにひどい〈囲い込み〉がやってきた／そして私を教区の奴隷にした」(Till vile enclosure came and made / A parish slave of me 183-184)という個所である。なぜSWが囲い込まれなければならなかったのか。その理由を述べる一節が4連の後半に見られる。

Harvests with plenty on his brow
 Leaves losses taunts with me
 Yet gain comes yearly with the plough
 And will not let me be (29-32)

豊富な穀物を刈り取る収穫期になると、人々はSWという土地が何ら収穫をもたらさないという嘲りの言葉をSWに残して行く。それでもSWを囲い込んで耕作地にすれば「利益」が毎年得られるので、彼らはこの土地にも手を付け、それを今の状態ままにして放って置かないであろう。つまりSWを耕作地にする目的は「利益」(gain)である。LROWの場合と同様、この詩における「囲い込み」以前と以後の〈土地〉についてSWが語る内容を検討していく。この詩において「囲い込み」の以前と以後の状況説明は何度も繰り返されている。

Though Im no man yet any wrong
 Some sort of right may seek
 And I am glad if een a song
 Gives me the room to speak (41-44)

SWは人間ではないけれど、受けた虐待が如何なるものであれ、「私」はある種の権利を求めてよいという。その権利が‘song’であっても、それが語る余地を自分に与えるなら、嬉しいという。この‘some sort of right’という表現において、クレアは〈土地〉にも権利をもたせることによって、それまでは人間の領域においてのみ用いられてきた「権利」という概念を「自然」の領域にまで押し広げている。〈土地〉が権利をもつという前提があってこの詩は成り立っている。SWの嘆きは詩人の感情や思考のエコーではなく、SWの感情や思考のエコーが詩人の声となっている。この権利は自分の感情や思考を語り、表現する権利なのである。SWは先ず「囲い込み」の経験から語る。

Ive got among such grubbling geer
 And such a hungry pack
 If I brought harvests twice a year
 They'd bring me nothing back (45-48)

SWは奪取する貪欲な一群と交わり始めたが、自分が年に二度収穫をもたらすとしても、利己心に捕われた彼らはその報酬をくれることはないと嘆く。‘grubble’はグロッサリーに‘grub; dig, uproot’とある。grubは‘to search in an undignified, abject, or grovelling manner; to rummage’(OED 7)あるいは‘to scrounge’の意味である。‘geer’は‘gear’のことであり、‘tools’(道具)と‘things’(やつら)の意味がある。したがって、‘grubbling geer’は「囲い込み」の作業のため草木を根こそぎにする道具、もしくは人の集団という意に解釈できるし、また上記のように、掠奪する道具、もしくは連中という意にも解釈される。人間に収穫をもたらし、恵みを与えるSWに人間は何も報いないと抗議する。人間は利己心のために自然の収奪をするが、自然のためには何もしないということは自然と人間の相互作用あるいは相互依存、いわば自然と人間の共存関係を絶とうとしていることだと訴えている。‘If I brought harvests twice a year / They'd bring me nothing back’ (47-

48) はまさにこういうことを訴えている。Thomas Paine はその著 *Rights of Man* (1792) の中で ‘the land should be owned by the people’ と説いた。そのことが結果的には土地に関する田舎の労働者の権利を認めさせることになった。この「人間の権利」に呼応するかのごとく、クレアは ‘rights of nature’ を提唱している。クレアのいう「自然の権利」とは、「生命の共同体の統合性、安定性、美しさが保存される」²³⁾ 権利のことである。土、水、植物、動物を、あるいはそれらを包括的に意味する「土地」がこの権利をもっているとクレアは提唱している。そして人間と自然のそれぞれがもつ権利は時間と空間とにおいて同一の広がりをもっており、互いに依存しているとクレアが考えていたことを Bate は指摘している。²⁴⁾

共有地や荒地が耕作地に変えられるのは、‘When grain got high the tasteless tykes / Grubbed up trees banks and bushes 59-60) というようにナポレオン戦争によって穀物の価格が高騰し、小麦の増産が ‘profitable’ であったからだ。SW は進駐していたローマ軍が使っていた石切り場でもあり、クレアの少年時代には美しい植物や小動物の生息地として有名であった。²⁵⁾ 「利益」のために他の土地が囲い込まれ私有地となっていく状況のなかで、石切り場としての SW も人間の手によって虐待される有様が次のように語られる。

And me they turned me inside out
For sand and grit and stones
And turned my old green hills about
And pickt my very bones (61-64)

私といえば、物事の良し悪しの分からないやくざな連中が砂や石材を取るために私を掘り返した。そして昔からある緑の丘をひっくり返し、死体にむらがる貪欲なハゲタカのように私の骨から肉をついばみ、私の所有物を彼らの私物にしてしまう。このように SW は「村の事柄」(town affairs) 即ち村の利害関係、商業主義に屈服していく。人間の利己主義、功利主義、商業主義に屈服する以前の SW の姿を語っている個所を見てみよう。SW は人間とそれ以外の生き物を養い、その生活を維持していたという。夏には美しい花を咲かせ、人々が遠方からやって来てはその花を愛でた。‘I used to bring the summer life / To many a butterflye’ (109-110) というように、そこに住むすべての生き物の命を維持していた SW は、教区の救貧院のイメージと救貧院の世話になっている労働者のイメージで描かれている。

Parish allowance gaunt and dread
Had it the earth to keep
Would even pine the bees to dead
To save an extra keep
Prides workhouse is a place that yields
From poverty its gains
And mines a workhouse for the fields
A starving the remains (73-80)

救貧院の世話になっている SW にはほんの僅かな手当てが給付される。その僅かな手当てでもって生き物の生息地を維持しなければならないとしたら、蜜蜂さえも餓死させてしまうだろう。そ

これは余分な生き物の口に食べ物を与えないようにするためである。SWの描写には、教区からの手当ても食べ物も不十分なため、餓死していく労働者のイメージが重なり合っている。富者が作った救貧院は貧しい労働者たちを虐待することによって彼らから「利得」を生み出すが、SWのほうは野原に住む生き物たちのための救貧院である。野原では生き残った生き物たちが餓死しつつある。SWは自分が傲慢な人間の救貧院とは違って、真正な救貧院となって生き物たちを救おうと願望する。しかし現実の有様はこうである。

The bees flye round in feeble rings
 And find no blossom bye
 Then thrum their almost weary wings
 Upon the moss and die
 Rabbits that find my hills turned oer
 Forsake my poor abode
 They dread a workhouse like the poor
 And nibble on the road (81-88)

SWは人間の workhouse と同様僅かな手当て、言い換えれば生き物の生命を維持するための僅かな環境しか持っていないと嘆く。蜜蜂はSWで花を見つけることができず、衰弱し、死んでいく。兎はそこが採石や「囲い込み」によって麦畑となり、「ひっくり返って」いるのを見出し、「私のところにあるみすぼらしい住処」を見捨ててしまう。彼らは貧しい労働者のように教区の救貧院を恐れる。ここでSWは、「自然界における種の生のリズムを侵し、所与の地域における生態上のバランスと統一を破壊する生産様式の悲劇的結果を警告している」²⁶⁾ ようだ。‘And nibble on the road’ とは次のような意味である。人や荷車の通る道は、兎にとって身を隠す物陰のない危険な場所、しかも草が生えにくいので、食べ物ほとんどない場所である。結局「私をもつ教区の収容所」(my parish home) に棲むことは、そこを生息地とする生き物にとってもまた耐え難いものになっているとSWは嘆く。ここでは春になって今日花が咲いても「翌日は慌しい鋤がやって来て、私を悲惨な休み場にしてしまう」(That next day brings the hasty plough / And makes me miserys bed 91-92)。生垣は取り除かれ、残ったのは溝だけである。少しでも石や砂利があれば、村人たちは砂袋や荷車でそれらをひとつ残らず持ち去ってしまった。このように人間は利己心のため欲望の趣くままSWから必要物を収奪し、それを変貌させる。SWにしてみれば、今や‘the tasteless tykes’ が自分の土地を所有しているのである。「だが虐待する人間との過酷な戦争で／枯れた草むらは屈服し、風に嘆いている」(But in oppressions iron strife / Dead tussocks bow and sigh 111-112) のである。こう読んでくると、この詩の趣旨は「過度の開発によって、またわれわれが自然とのバランスや調和をとりながら生存していないことによって傷つく可能性がある生き物としての土地という考え方」(the idea of the ground as a living thing, capable of being wounded by over-exploitation and our failure to live in a balance and harmony with nature)²⁷⁾ にわれわれの注意を向けさせることにあるといえる。

SWの収奪以前について語られている部分をもう少し見てみたい。

There was a time my bit of ground
 Made freemen of the slave

The ass no pindard dare to pound
 When I his supper gave
 The gipseys camp was not affraid
 I made his dwelling free (177-182)

低賃金で長時間という過酷な条件のもとで働かざるを得なかった労働者の生活は、まさしく奴隷状態であった。SWの土地は、狭くても彼らに休息の場や食べ物を与えることによって、束縛から少しでも解放したのだという。「私がロバに夕食の草を食ませているとき／ピンダーは敢えてそのロバを囲いに入れようとはしなかった」とは、家畜がSWの土地でいつまでも草を食む自由をもっていたこと意味する。‘pindard’は‘pinder would’であり、‘pindar’はグロッサリーによれば‘person employed to impound strayed cattle’ (OA) である。SWは人間にも生き物にもやさしく、親切であった。‘And poverty in me could always find a humble stall / A rest and lodging free’ (170-171) に見られるように、とくに貧民やジプシーのために休息や生活の場所を「無料で」提供していた。ジプシーたちはここで野営し、暫く生活するのに何の不安もなかった。ジプシーは「土地がもっている権利」(the rights of the land) や家畜と相互に連鎖している。下層労働者と同じく社会からの追放者であるジプシーは、そういうふうに関連した「効果的に規定された生態系」(an effectively regulated ecosystem)²⁸⁾ の中で生活していた。村人達はSWに「自由」を与え、SWは彼らに土地を「無料」で使う権利を与えることで両者は相互依存に基づくバランスのとれた関係を保っていた。この点に関し、Bateは‘Swordy Well was previously integral to a community of reciprocal respect, in which it gave rights to the vagrant in return for its own freedom’²⁹⁾ と述べている。

次に貪欲な人間が推進する「囲い込み」がこうしたSWの存在を破壊していく有様を語る部分を見てみる。

Yet worried with a greedy pack
 They rend and delve and tear
 The very grass from off my back
 Ive scarce a rag to wear
 Gain takes my freedom all away
 Since its dull suit I wore
 And yet scorn vows I never pay
 And hurts me more and more (137-144)

貪欲な地主階級や中産階級にうるさく攻め立てられて、労働者たちはSWの地面から雑草を根こそぎにする。労働者たちは窮乏していたため、余儀なく「囲い込み」の仕事をする。‘pack’は‘a number of animals kept or naturally congregating together; applied spec. to a company of hounds kept for hunting’ (OED. 4) の意であり、‘worried’が‘killed or mangled by biting’の意であるから、労働者たちは貪欲な猟犬の一群にずたずたに噛み裂かれ、苛められる獲物のイメージで描かれている。雑草も剥ぎ取られたSWと貧しい労働者の二つのイメージは類似している。貪欲な一群が追求する「利益」はSWから〈自由〉をことごとく奪う。それはSWが貧民のくすんだとび色の制服をまとっているからである。樹木・草むらを根こそぎにされることによって、「私は身に付ける襤褸一枚もたない」というように、SWは茶褐色の土がむきだしの‘naked’な地面を曝してい

る。このSWの姿は、産業主義化していく英国社会の中で人間の権利を奪われていった労働者たちの姿でもある。そういう意味で、‘Gain takes my freedom all away / Since its dull suit I wore’はこの詩全体のなかで最も多義的かつ暗示的な詩行のひとつであり、すぐれて印象的である。クレアが〈土地〉を人間のイメージで表現するとき、「自然」の人間化という特徴が見られる。この特徴はワーズワスが貧しい田舎の人々を自然化したのとは対照的である。この特徴に関連して、Zimmermanは次のように述べている。‘The independence of human and natural worlds in Clare’s writings is so thorough that we detect the human world in natural objects, and vice versa.’³⁰⁾ このコメントはクレアの自然観と擬人法の特徴を捕えており、非常に示唆に富む。さて「利益」を追求する利己心の貪欲さは2連で強調される。

Where profit gets his clutches in
Theres little he will leave
Gain stooping for a single pin
Will stick it on his sleeve (13-16)

利益を追求する利己主義者は金目の物を掴み取り始めると、ほとんど残さず自分のものにしてしまう。他人と共有する考えなど毛頭ない。地面に落ちている一本のピンでさえ身をかがめて拾い、それを袖に刺す。SWが最も嫌悪し、軽蔑するのはこのような人間である。

この詩において最も注意を払うべき点は、SWが自分と「生き物」(nonhuman life)との関係を重視していることである。調和した生態系の中では、土地とそこを生息地に行っている生き物は不可分の関係にある。生態系が崩壊する危険性を認識していた詩人は、「囲い込み」によって生息地を奪われる生き物が消滅していくことが、種のひとつとしての人間の生存に悲劇をもたらすことの緊迫感を抱いていたと思われる。この詩人はこれらのlament poemsのみならず他の多くの詩や散文においても、「19世紀の後期になるまで科学的具体化が行われなかった生態学の概念」(an ecological concept that would not receive its scientific fleshing out until later in the century)³¹⁾を書き表している。SWは、「生き物」の存在を無視することが人間をますます不幸に導いている現実を訴えている。

And should the price of grain get high
Lord help and keep it low
I shant possess a single flye
Or get a weed to grow
I shant possess a yard of ground
To bid a mouse to thrive
For gain has put me in a pound
I scarce can keep alive (145-152)

穀物の価格が高騰すれば、「利益」のために囲い込まれたSWは土地を奪われ、蠅一匹、一茎の雑草さえ自分のものとして養い維持していくことができない。『創世記』において神がしたように、「鼠に繁栄せよと命じる」こともできない。なぜならば、SWは人間によって土地を奪われ、ほとんど瀕死の状態であるからだという。‘I shant possess a yard of ground / To bid a mouse thrive’

という表現は、「土地」の所有についての次のような重要な考えを人間に示唆している。労働者階級から土地に関する権利を奪い、私益を獲得するために土地を所有することは神の意図に反するものである。土地はただ単に人間の所有物ではない。土地は人間とあらゆる生き物にとっての‘home’であるという考えである。生き物の生息地としての土地を失ったSWはこう嘆く。

I've scarce a nook to call my own
 For things that creep or flye
 The beetle hiding neath a stone
 Does well to hurry bye
 Stock eats my struggles every day
 As bare as any road
 He's sure to be in somethings way
 If eer he stirs abroad (113-120)

SWは生き物達を養い、生命を維持していくための「自分の物と呼べる人目につかない、引っ込んだ場所」をほとんど〈所有〉していない。石の下に隠れ住む甲虫は、この場所に棲もうと思わないでさっさと飛び去るほうが賢明である。なぜならば、ここには草むらがほとんどないからだ。家畜は私が骨折って育てた僅かな草を食べている。ここの状態は、人や荷馬車の往来ゆえに草がほんの少ししか生えない道路の状態と同じである。‘struggle’はグロッサリーに‘n., var. of strag or straggle; thin-growing straggly crop’ とあるが、‘my struggles’はR. K. R. Thorntonの‘the grass I struggled to grow’³²⁾ という解釈が適当である。甲虫が自分の住処の外に出るならば、必ず誰かの私有地に侵入することになる。私有地は「利益」を得る目的のために所有されていて、そこへの甲虫の侵入はその目的達成の妨げになるという。引用の最後の二行‘He’s sure . . . he stirs abroad’における‘He’は、すべての生き物を象徴している甲虫のことであるが、それは農業労働者もまた暗示している。囲い込まれて富者の所有物となった私有地に許可なしに入ると、彼は侵入者あるいは密猟者とみなされ、その罪は絞首刑に値した。³³⁾ この個所でも、私利の追求という目的のための人間による土地所有がそこに生息する生き物を消滅させるとSWは告訴している。土地を所有することの意味は、生き物を支配するのではなく、その生息地を保持し、バランスのとれた生態系を維持することである。³⁴⁾ SWの土地がこういう状況であったから、SWはつぎのように訴える。

Let profit keep an humble place
 That gentry may be known
 Let pedigrees their honours trace
 And toil enjoy its own (53-56)

利益の追求において現れる過熱した利己心とその本来の控えめな居場所に留まらせようと訴えている。上流階級の者は困窮する人々に手を差し伸べる義務がある。この訴えは、どの人がそういう上流階級に相応しい者であるかを人々が分かるようにするためである。高貴の生まれの者は自分の家系の名誉に注意し、家名に恥じないようにすべきであると戒める。そしてさらに彼らは、自分たちが雇った労働者たちに彼らの労働に見合った報酬を与えるべきだと訴えている。

SWの語りの中にはもうひとつ重要な特徴がある。それはSWが「困り込み」の犠牲になる以前、「自由」(freedom)をもっていたことである。人間の欲望によって土・砂利・水・草木といった自然の事物を奪取されるSWと、産業資本主義によって人間の権利を奪取されていった労働者との同一化はまた別の共通の虐待といえる〈自由〉の剥奪によっても強調されている。SWにとっての「自由」は、人間による破壊から免れた、「密やかな」生息地を生き物たちに与えることを、また農業労働者にとっての「自由」は、低賃金と長時間の重労働からの解放と経済的独立を意味するのではないのか。教区の世話になっていることを嘆くSWは「自由」と「独立」を願望し、物乞いはしないという。

I am no man to whine and beg
 But fond of freedom still
 I hing* no lies on pitys peg
 To bring a gris** to mill
 On pitys back I neednt jump
 My looks speak loud alone
 My only trees they've left a stump
 And nought remains my own (121-128) *v., hang **n., var. of grist; corn for grinding (OA)

SWは悲しげな声で物乞いをする人間ではないが、人間と同じく「自由」が好きである。製粉用の小麦を手に入れるために、でっち上げた嘘の病名を通行人に見てもらおうべく首から下げ、憐れみを乞うたりはしない。というのは物乞いをしてまで人の憐れみに頼る必要はないからである。私の外貌を見ただけで、私が如何なる状態にあるかは明確にわかるからである。即ち‘tasteless’かつ‘greedy’な「掠奪する一群」(grubbling geer)が私の唯一の樹を切り倒し、その切り株だけが残った状態である。私の所有物といえるものは今はもう何もなくなったと嘆く。この連では、教区の救貧院の世話になっていることから、換言すれば物心両面において隷属状態にあることから脱して独立した状態になることへの願望が読み取れるが、この願望は「自由」への願望に他ならない。SWは無論、「人間」ではなく「自然」の一部である特定の場所を表現している。だがMcKusickが‘Just as all politics is local, so too all ecology is local; and a true ecological writer must be “rooted” in the landscape, instinctively attuned to the changes of the earth and its inhabitants’³⁵⁾と定義し、localityを重視しているように、特定の場所としてのSWは極めて意義深い。人間と生き物の精神作用のカテゴリーを表すことばである‘freedom’は、〈場所〉であるSWがもつ本然的な状態を表すことばとなっている。SWが貧しい労働者たちと同一視されているか、あるいは労働者たちを象徴しているという印象を読者が受け取るのは確かである。それでは、SWのいう‘freedom’は労働者たちの「自由」を象徴することばに過ぎないのであろうか。SWは人間ではなく、土地なのである。だがその土地は詩人によって生命を与えられ、ものを語る。しかもSWは詩人の内面を語るのではなく、自分の環境の変化とそれにたいする反応を語っている。SWが語りたいたいと思っている事柄を詩人が詩に書き留めているのである。したがって、‘freedom’という語は労働者たちの「自由」を暗示しているかもしれないが、けっしてそれを象徴はしていない。その語はまさしくSW自身について叙述しているのである。

SWの語りの中には「友愛」という重要な特徴もある。SWのいう「友愛」は、自然の中で「共生的調和」(symbiotic harmony)の状態で存在する生き物を維持するという形で現れる。その

生き物に生息地を与え続けることによって、その存在を永遠化する願望を次のように語る。

And if I could but find a friend
 With no dectet to sham
 Who'd send me some few sheep to tend
 And leave me as I am
 To keep my hills from cart and plough
 And strife of mongerel men
 And as spring found me find me now
 I should look up agen (193-200)

SWは欺瞞に満ちた言葉で人をだますことはしない友が欲しいという。丘が切り取られ、これ以上変貌することのないように、その友は、商売の取引で私利を求める下劣な人間どもからSWを護ってくれる。この友は、羊を養うことができる今の状態を尊重し、SWをそのままにしておいてくれる。そうすれば、SWは悲惨な現状から再び生き物に生息地を与える能力を回復することができるであろうという。ものごとの真価を識別できない人間が田舎の社会を支配し、「土地」と労働者を共に虐待しているが、そういう人間ではなく、「土地」と「人間」が相互依存によって調和した関係を維持し、「人間」を含めたすべての生き物の生息地を、即ち生態系を保護すべきという、自分と同じ考えを抱く人間の出現をSWは待望している。この考えは生き物を人間と同じレベルで見ようとする平等主義に基づいている。クレアが「平等」という観念をここでもまた「人間から非人間世界へと」拡大していることは注目に値する。³⁶⁾

この詩の最終連は、それが書かれた1820年代における人間と自然環境の状態及び両者の関係を総括的に語っている。それを聴く今日のわれわれは、それが当時としては極めて洞察力に満ちているがゆえに、またその叙述の的確さゆえに驚異の念に打たれる。英国ロマン派詩人のなかで、当時の人間中心主義の弊害を予言し、告発した詩人がほかにいたであろうか。

And save his Lordships woods that past
 The day of danger dwell
 Of all the fields I am the last
 That my own face can tell
 Yet what with stone pits delving holes
 And strife to buy and sell
 My name will quickly be the whole
 Thats left of swordy well

大航海時代には船舶用の建材として、産業革命期には製鉄用溶鉱炉の燃料などの用途のため、樹木が大量に伐採され、英国の森林は急激に減少した。伐採される可能性の高かったこれらの「危険な時代」を生き残った貴族の所有する森を除いて、自分の外観を見てどこの野原であるか認識できるほどまだ地形的特徴を留めているのは、すべての野原のなかで「私」、すなわちSWが最後の者である。だが「私」も「石切り場」や「鋤で掘った穴」、さらに「売買」の競争、即ち石・砂利を取られたり、耕作地に転用されたりして、〈商品〉や土地そのものの取引などの商業行為

における競争によって損なわれ、地形上の様相が変えられていくであろう。そしてその結果、こういう虐待を受ける以前に所有していたものをすべて奪取され、アイデンティティを喪失し、SWという場所に残るものは名前のみという時期がすぐにやって来るといふ。‘strife to buy and sell’ という表現には産業革命成熟期における過熱する商業主義への抗議が込められている。「自由放任主義」(laissez-faire) という国策は公益より私益の追求を優先する風潮を生み出した。SWの嘆きの言葉は「土地」と労働者を虐待するこの風潮に対する抗議である。この抗議は詩人の思想と感情を代弁していると解釈するより、「人間の権利」と相応する「自然の権利」をく土地が主張していると解釈すべきである。このく土地の主張は、環境破壊を続ける人間の営為を近年やっと反省するようになった現代人が、今一度注意を払うべき生態学的な意味における多くのものをもっている。1820年代当時漸く芽生えてきたがほとんど無視された「自然の権利」という観念については、クレアは「自然の生き物は、英国の普通法の基礎を成す人権に似た権利をもっている」(natural beings have rights analogous to the civil rights that underlie English common law) という認識をもち、「土地はそれ自身、環境上の苦痛の種を軽減する法的権利をもっている」(the earth itself should have the legal right to redress of environmental grievance) という考えを提出している。³⁷⁾ これは時代を先取りした実に驚嘆すべきことである。

この詩でクレアは、ひとつの土地が農業生産品の増産や石材とか鉱物資源の採掘といった可能性、いわば資本主義経済の市場におけるく商品を生産する可能性以外のもっとより大きな価値をもっていることを力説している。英国の典型的エコロジストと見なされている John Ruskin は、「政治経済学の根本的な物質的基礎は金銭、労働、生産ではなくて、きれいな空気、水、土である」³⁸⁾ と主張したが、クレアはまさしくラスキンに先んじてこのような主張、即ち ‘the cause of ecology’ をもった詩人であった。西洋人が自然にたいして畏敬の念を抱く関係から、自然を開発・乱獲・搾取する関係へと変化する歴史の転換期に生きるクレアが自然環境のもつ経済的以外の多様な価値を重視し、自然環境を保護し、維持すべきであると人々に強く説得していることの功績は大きい。自然のもつ共生的調和と生態系の完全性についての正しい理解、食物連鎖と捕食についての理解、人間の貪欲と残虐行為に対する環境保護、沼沢・湿地というような荒地保存の重要性の認識といった事柄におけるクレアの生態学的先見性を指摘した G. Crossan は、‘As time goes on Clare’s ecological voice is speaking to us all with increasing urgency’³⁹⁾ という。これは正鵠を射た評言である。

以上のようにふたつの嘆きの詩を読んできると、LROWでは未熟な詩人である「私」に同調する者として成熟した守護神が「人間」による収奪の話を語るが、LSWでは土地自体がその話をより大きな確信をもって大胆に語っていることがわかる。これらの二詩に見られる語りの手法の巧妙さと内容の深みという点を考慮するとき、クレアが ‘anti-enclosure poems’ における「ひとつの新しい成熟」に到達していることは明らかである。「囲い込み」についての後の詩においては、このような擬人法という策術を用いなくて、クレア自身が「自然」の損失とその喪失感を義憤の声で語っていくことになる。

注

- 1) Seamus Heaney, *The Redress of Poetry* (faber and faber, 1995), p. 76.
- 2) See Sara Zimmerman, *Romanticism, Lyricism, and History* (State University of New York Press, 1999), p. 169.

- 3) John Lucas は LROW が「当時の急進的な新聞に見出される民衆のラディカリズムがもつ言葉」を用いていると分析している。See John Lucas, 'Clare's Politics', *John Clare in Context*, eds. Hugh Haughton, Adam Phillips and Geoffrey Summerfield (Cambridge U. P., 1994), p. 154.
- 4) See John Lucas, *Writers and Their Work: John Clare* (Northcote House, 1994), p. 38.
- 5) この詩のテキストは Erick Robinson, David Powell and Margaret Grainger eds., *The Early Poems of John Clare 1804-1822* (Clarendon Press, 1989) を使用した。
- 6) *The Early Poems of John Clare 1804-1822* の巻末の 'Explanatory Notes' には 'Round Oak Waters is the stream fed by Round Oak Spring, a natural spring in the south-west corner of Royce Wood.' とある。
- 7) Zimmerman, p. 168.
- 8) *Ibid.*, p. 174.
- 9) See Johanne Clare, *John Clare and the Bounds of Circumstance* (McGill-Queen's U. P., 1987), p. 48.
- 10) Margaret Grainger ed., *The Natural History Prose Writings of John Clare* (Clarendon Press, 1983), p. 284.
- 11) See Jonathan Bate, *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition* (Routledge, 1991), pp. 81-82.
- 12) See Elizabeth K. Helsinger, *Rural Scenes and National Representation: Britain, 1815-1850* (Princeton U. P., 1997), pp. 33-34.
- 13) John Goodridge, 'Pastoral and popular modes in Clare's 'enclosure elegies'', *The Independent Spirit: John Clare and the Self-taught tradition*, ed. J. Goodridge (The John Clare Society and The Margaret Grainger Memorial Trust, 1994), p. 142.
- 14) Juliet Sychrava, *Schiller to Derida: Idealism in Aesthetics* (Cambridge U. P., 1989), p. 201.
- 15) *Ibid.*, p. 203.
- 16) Edward Storey, *A Right to Song: The Life of John Clare* (Methuen, 1982), p. 94.
- 17) 「ラダイト」は、イングランド中・北部の織物工業地帯において新しい機械が導入されたために職を奪われたと考え、その機械の破壊運動に参加した労働者達である。マックス・ベア著『イギリス社会主義史』(大島 清訳, 岩波文庫, 1996) には次のような記述がある。「ついに嵐がきた。最初はラッド主義の形態においてである。激怒した労働者は機械を破壊した。一八一二年三月、議会は機械保護の法律を制定し、ラダイトの行動を死刑をもって罰した。一八一三年一月の第二週に、十八人の労働者がヨークの絞首台で処刑された。」(p. 238)
- 18) Jonathan Bate, 'The Rights of Nature', *The John Clare Society Journal* Number 14 (1995), p. 8.
- 19) Goodridge, p. 152.
- 20) Swordy Well については、E. Robinson and D. Powell eds., *The Oxford Authors: John Clare* (Oxford U. P., 1984) の Notes に 'Usually known as Swaddy Well, an ancient stone quarry used by the Romans, famed in Clare's childhood for wild flowers, white lizards, and a fine species of copper-hued butterfly.' と説明されている。
- 21) この詩のテキストは *The Oxford Authors: John Clare* を使用した。
- 22) See Johanne Clare, p. 44.
- 23) A. ドブソン編著、『原典で読み解く環境思想入門』(松尾 眞他訳, ミネルヴァ書房, 1999), p. 256.
- 24) Bate, 'The Rights of Nature', p. 7.
- 25) 散文にはクレア自身と SW の関係を示すかなりの数の記述がある。その内のふたつの例を見ておきたい。

Saw four odd looking Birds like large swallows of a slate color on their wings & back & their bellys white they had forked tails & long wings & flew exactly in the manner of the swallow but instead of skimming along the ground they rose to a great height I frit them up from Swordy well a pond so called by the roman bank which is never dry & often haunted by water birds (*The Natural History Prose Writings of John Clare*, p. 100)
 Wednesday 3 Nov. 1824

Took a walk with John Billings to swordy well to gather some 'old mans beard' which hangs about the hedges in full bloom its downy clusters of artificial like flowers appear at first sight as if the hedge was litterd with bunches of white cotton (*Ibid.*, p. 198)
- 26) Johanne Clare, p. 43.
- 27) Goodridge, p. 152.
- 28) Bate, 'The Rights of Nature', p. 12.
- 29) *Ibid.*, p. 12.
- 30) Zimmerman, p. 168.
- 31) W. John Colleta, 'Ecological Aesthetics and the Natural History Poetry of John Clare', *The John Clare Society*

Journal Number 14, p. 44.

- 32) バーミンガム大学の R. K. R. Thornton 教授によるこの詩のパラフレーズは、その読み方と解釈において、筆者には大きな教示となった。
- 33) クレア自身、1825年4月16日私有地に踏み入って、森番から密猟者だと非難されそうになった経験を次のように記述している。
Took a walk in the field a birds nesting and botanizing and had like to have been taken up as a poacher in Hillywood by a meddlesome consieted keeper belonging to Sir John Trollop he swore that he had seen me in act more then* once of shooting game when I never shot even so much as a sparrow in my life — what terryfying rascals these wood keepers and gamekeepers are they make a prison of the forrests and are its joalers (E. Robinson and D. Powell eds., *John Clare by Himself*, The Mid Northumberland Arts Group Carcanet Press, 1996, p. 222) *than
- 34) Helsing 氏は SW の抗議と〈土地の所有〉の関連性について次のように鋭い指摘をしている。この指摘は LSW を生態学的視点から理解する上で大変興味深い。
The land's protests are founded on a different concept of possession in which ownership is demonstrated through use as a power for (rather than over) life. To be stripped of "own" is to be deprived of the power to give and enjoy life. (pp. 149-150)
- 35) James McKusick, "A language that is ever green": The Ecological Vision of John Clare', *University of Toronto Quarterly*, 61, pp. 226-249. なお、McKusick 氏が筆者に電子メールで送ってくれた同論文には独自の頁数が付いている。引用箇所はそれに拠ると p. 7 である。
- 36) See Zimmerman, p. 158.
- 37) See McKusick, p. 18.
- 38) See Bate, *Romantic Ecology*, p 59.
- 39) Greg Crossan, 'John Clare: Our Contemporary', *John Clare: A Bicentenary Celebration*, ed. Richard Foulkes (University of Leicester, 1994), p. 65.